

第5回京都市全員制中学校給食検討会議 会議録

1 日 時

令和5年10月30日（月曜日） 15時～16時

2 場 所

京都市総合教育センター 第3研修室

3 出席者（50音順、敬称略）

今川、尾崎、梶浦、國重、塩見、園部、中山、藤下、山崎、山下、米田

4 事務局

教育委員会事務局体育健康教育室長、同室担当課長（給食）

5 議 題

- (1) これまでの検討状況の総括について
- (2) 基本的な考え方案（実施方式含む）について
- (3) その他

<議題(1) これまでの検討状況の総括について>

（事務局から資料1について説明）

<議題(2) 基本的な考え方案（実施方式含む）について>

（事務局から資料2について説明）

委 員 資料の内容に異論はないが、よりよい全員制中学校給食にしてい
くためには、給食を教材として食指導を充実することが重要である。
そのためには1校1人の栄養教諭を配置すべきだが、国の定数の制
度が十分ではないことから、是非とも国に対して改善要望をしてい
ただきたい。

委 員 子どもたちが給食をより身近に感じるためにも、作り手と学校や
子どもをつなぐ栄養教諭の役割は大きい。

委 員 資料の内容に異論はないが、今後、給食センターを建設するに当た
っては、十分な見学スペースや体験可能な回転釜の設置など、生徒に
とって給食が身近になるような工夫をお願いしたい。

座 長 事務局におかれては、これらの御意見を踏まえ、今後の具体的な検
討を進めていただきたいが、示された資料については、検討会議の意
見をまとめたものとして異議無しということによろしいか。

（異議なし）

<議題(3) その他>

(事務局からは特になし。)

座 長 今回は最終回となるため、これまでの感想や今後への期待などを一言ずつお願いしたい。

委 員 様々な立場の方の考えを聞き、改めて「食」の大切さを考えさせられた。全員が同じ給食を食べ、食に関わる人々や食物への感謝の心が育まれるとともに、和食文化が継承されていくことを期待している。保護者としても、給食や食に関する子どもとの会話を通じて、家庭の食生活の向上につなげていきたい。

委 員 学校での昼食時間の様子を見ると、家庭の状況によって昼食の内容に差があることは実感してきており、温かい給食が全員に提供されることを望んでいた。全員制給食の実施により、子どもたちの笑顔が増え、今以上に有意義な給食時間となることは明らかだろう。食育の点からは1校1名の栄養教諭が望ましいと思う。

委 員 会議を通して食育の大切さを改めて感じた。小学校では、子どもたちが「給食が楽しみ」、「いただきます」、「ありがとう」という感謝の気持ちなどを給食調理員に伝えている姿が見られる。センター方式の場合でも作り手を身近に感じられるような形で実施されることを望んでいる。また、栄養教諭が配置されている学校では、食育の授業に入るなど、より食育が充実している。小学校も含めて配置の充実が望まれる。

委 員 子どもたちは食べることが好きなため、全員制給食は子どもたちにとって非常に良い時間になるだろう。教職員は給食の魅力や食に関する知識、ノウハウを一層身に着けるべきだと考える。また、実施に向けて、学校がすべきことや検討すべきことを整理し、スムーズに導入できるように期待したい。

委 員 小学校では、日常における食育は栄養教諭だけでなく担任も行っており、担任の声掛け一つで食育の充実度が変わることを感じている。全教職員が同じ方向性やスタンスで子どもに関わっていくことが大切である。

委 員 全員制給食になることで、給食を教材とした食育が小学校から継続できることはもちろん、中学生ならではの食育をより充実させることができる点に期待している。子どもや保護者などが求めている栄養バランスのとれた給食やアレルギー対応、食育の充実等の観点は栄養教諭に期待されている部分が多いのではないかと感じている。教室で指導する担任に食育の内容を伝えることができる点や各校での食育の充実の点で栄養教諭の存在は大切であり、是非、配置を充実していただきたい。

委員 様々な立場の方の思いがこもった全員制給食が進んでいくことに嬉しい気持ちである。我が子は小学校入学後、食事量が増加したり、家庭での献立を見て「緑が少ない」と指摘したりするなど、食に対する興味が深まった。これも学校での食育のおかげであると感じており、全員制給食になることで中学校でも継続されることを期待している。多くの子どもたちが笑顔になるような中学校給食を早期に実現していただきたい。

委員 「食」は人と人をつなぐ大きな力を持っている。作り手や食べ手、その間に入っている教職員、あるいは配膳など一つ一つの繋がりの中で「食」ができあがってくる。効率だけを求めれば、工場食のようなものになってしまうため、作り手側が不特定多数ではなく京都市の子どもたちに作っているという思いを持つことも含め、人と人をつなぐような作り手を身近に感じることができる給食になることを期待している。

委員 校長のリーダーシップのもと、栄養教諭が中核となって食育を推進することが大切である。食の重要性や心身の健康等の点から給食はやはり重要となる。食べるものは同じでも手作りというだけで感じ方が異なるため、センター方式となった場合でも、子どもたちには調理の様子などを見せる工夫も必要だと考える。京都市の学校給食や食育は素晴らしいため、中学校の教職員にも理解いただき、可能な限り、これまで培ってきた本市の給食の良さを踏襲しながら、持続可能な形で、かつ早期に実現できることを期待している。

委員 早期実現に向け、非常にスピード感をもって取り組んでいただいたと感じている。この間、保護者代表として、保護者や子どもの思いを背負って発言させていただくとともに、会議や視察を通じて勉強をさせていただいた。また、視察では事務局職員が熱心に質問されている姿を見て、「この人たちに任せておけば大丈夫」ということを感じることができた。よりよい中学校給食となるよう祈っている。

委員 検討会議での各委員からの意見を踏まえ、引き続き、各論を検討されることを願っている。温かい給食が中学生全員に提供されることは必ずプラスになると思うので、早期に実現できるよう尽力いただきたい。

<閉会>

(教育委員会事務局体育健康教育室長 挨拶)